

る。

ちなみち、「四年の間、草稿を十一度まで認めかへて」板下に渡したという「解体新書」のこの部分（鼻編第十一）はつぎのようになっている。

「○夫、鼻者隆起^{ツチ}而居^ス面之中口上額下^ニ」

すなわち「フルヘッヘンド」は「隆起」のなかにとけこんだかたちである。

七

前野良沢は、かつて太宰府神社の神前で、自分は和蘭の術に従事しているが、いやしくも道をきわめずに、みだりに有名になる手段にはしたくないと誓ったという。良沢があれだけ深入りして「解体新書」に、玄白が「序」を求めたところ、この理由でこわったという。

それはそれとして、良沢が「解体新書」の訳述にどのようなかたちでかわったかは、「新書の訳文」のなかでさがし求めるよりほかない。「新書」に訳述の不備が見つかるが、それらすべて良沢のせいにすることはできない。むしろここまでにままとまったことは、良沢の勞に負うところが大きいにちがいない。

（本講演は昭和五十八年十月例会にて発表した。）

江戸医学館の考試弁書『癩癩狂辨』について

——当時の精神病学説をみる——

岡田 靖 雄

ここにとりあげたのは、医学館における精神病学答案集という

べきものである。二三名分のうち一四名分の名がはいっていて、そのなかに桂川甫悦（のち藤澤次謙、一八三五—一八八一）および多紀安琢（元琰、一八二四—一八七六）の名があるので、一八五〇年（嘉永三年）ごろのものか。とじこまれている最初に「癩癩狂辨校字」がついていて、各篇について文章・用字を批評し、また「癩癩狂辨批語」は主として内容を批評している。

ほとんどが白文の漢文であるので、全篇をよみくだしてはいないが、その内容は、「癩」、「癩」、「狂」のそれぞれの概念、病態生理（漢方医学的な考え方）および治療法を、「素問」、「靈樞」、「難経」などを引用して論じているものである。だいたいのものは、「癩癩」は一病であるが、一〇歳以下の癩癩を「癩」といい、成人のそれを「癩」というとしており、「狂」を精神病であるとする。自分の経験にほんのちよつとでもふれているのは二篇だけである。「癩」および「癩」を異病としていて、「批語」に、その説当をかくなどかかれているものが四篇ある。

これらから察すると、医学館では、癩・癩・狂とはこういうもののだ、という形ではおしえていない。古典の読み方をおしえていて、それらからなにつかみとるか、まなぶ者にまかされていたようである。つまり、江戸医学館における教育は、考証派とされる多紀家の学問の方法にそったものであった。

岡田の報告要旨は右のようなものであった。岡田は演題をはじめ「幕府医学館……」としていたが、宗田一氏は、医学館の刊行物には「江戸医学」とはいつていたし、固有名詞として「江戸医学館」の名をつかっていることが適切であることを指摘された。ま

た、山田光胤氏ほか漢方専門の方がたが、「癩」、「瘡」、「狂」の概念の変遷などについて追加してくださった。

司会の緒方富雄氏は江戸医学館における教育の実態について質問をくりかえされた。だが、その具体的なことはあまり解明されていないようである。この『癩癩狂辨』はそれをうかがわせる貴重な資料であることが、討論のなかで指摘された。なお、これはわたしたちの精神科医療史研究会が明治古典会で入手したもので、ほとんどの用紙は「医学館」とはいつている野紙である。今後各位の協力をえて、この内容の充分な解明に努力したい。

(自抄)

蘭医ポンペと日本

宮 永 孝

ポンペ書簡の多くは、出島のオランダ弁務官(ドンケル・クルチウス)とバタビアの総督に宛てて出したものから成っている。ポンペ書簡の現物はハーグの国立文書館にあり、またそれをマイクロフィルムにとったものが東大の史料編纂所にある。今回、解説できたのは、

- 一 一八五七年(安政四)の分が九通
 - 二 一八五八年(安政五)の分が十一通
 - 三 一八五九年(安政六)の分が十二通
- の、計三十二通である。

その他、ポンペがバタビアの「国立医薬貯蔵所」、S Rijks Med. gazin van Geneesmiddelen に宛てて出した、薬と医療品の注文書

も何通か解説できた。

ポンペが長崎を発ち、帰国の途についたのは、一八六二年(文久二)十二月一日(和暦九月十日)のことであるが、一八六〇年(万延元年)から一八六二年(文久二)十二月までの期間に出した書簡は、どこにあるのか見当らない。日本滞在中の最後の二カ年間は、閲読できなかった。

ポンペ書簡の中には、史料的な価値が高いものと、そうでないものがある。が、多少ともおもしろい内容のものだけについて述べてみる。

ポンペが長崎に着いたのは、一八五七年(安政四)九月二十一日の夜のことであるが、書簡から考察するとかれはすぐファン・デン・ブルック医師と交替しそのすまいに入ったわけではなかった。ポンペは一カ月以上も、ヤパン号(のちの威臨丸)の艦内で暮らさねばならなかったようである。

一八五七(安政四年)十月二十四日付の書簡は、ファン・デン・ブルックから薬や医薬品を引き継ぐことができたが書類のファイイルや手紙類は一切渡してもらえず、また住居も空けないので、難渋している旨を伝えたものである。

一八五八年(安政五)八月二十六日付の書簡は、アジア・コレラが発生したために、薬を多量に請求している。翌一八五九年(安政六)六月十日付の書簡の中では、シナの蛭(ひる)を五千三百びき購入して欲しい、と述べている。ポンペは「日本の蛭よりも、シナのそれの方が、体も大きく、よく血を吸う。長崎では日本の1/4の値段で購めることができる」といっている。